「広島大学　欧米文化研究」第4号　1997年

文明化に対するインディアン部族の対応
―1820年代におけるチカソー族文明化学校の事例―

岩﨑　佳孝・岡本　　勝

はじめに

1775年4月に始まり8年以上にもおよんだ独立戦争は，1783年のパリ講和条約によって終結を迎えた。以後アメリカ合衆国は，新興国家としての基盤を揺るぎないものとする過程で，様々な問題に直面していくことになった。そのひとつが，パリ条約によって合衆国領となった地域内に居住する北米大陸先住民（以下「インディアン」と呼称）に，如何に対処するかという問題であった。西部への進出を進める上で，インディアン諸部族の存在は，合衆国にとって避けて通ることができない障害であった。しかしながら，建国間もない合衆国には，多数のインディアン部族との全面戦争を行う余裕はなく，敵対するインディアンに対しては武力を用いて対応しつつも，その一方では融和的政策も取り，インディアン部族から条約によって「平和的に」土地を獲得するという方法も模索されたのである。

そのような中，武力を用いない方法として，いわゆる「文明化」政策が提示された。具体的にそれは，インディアンに英語やキリスト教を教え，狩猟生活を放棄させるために，農業技術を伝授するというもので，結果として，インディアンを西欧キリスト教文明の中に組み込むことを意図するものだった。文明化によってインディアンを農耕民族化することで，彼らの主な生計手段であった狩猟に必要とされていた広大な土地の多くが不用なものとなり，それらが平和的に白人開拓民に開放されるというシナリオが，この政策の背後に見えかくれするのであった。

ところで，文明化には別の側面があった。それは，インディアンに対してあからさまに敵意を抱かない人々から生まれたものだった。白人知識人階級の中には，インディアンを「善き未開人」，「高貴な野蛮人」として，生来白人とは能力において何ら劣ることがない人種であり，自分たちと同じ文明を享受する能力があると認識する者がいた。[1] このような考えから，教育によってインディアンを文明化することは可能であり，優れたキリスト教文明の恩恵をインディアンにもたらすことこそが責務だとする思想が生まれた。そしてこの思想を掲げたキリスト教各伝道団体によって，インディアンに対する布教活動が，文明化の別の側面として行われるようになったのである。

こうして，18世紀末以降合衆国政府が各部族に派遣した担当官や，キリスト教各伝道団体により，個別に推進されてきたインディアンの文明化は，1820年代に新たな局面を迎えた。それは，1819年に連邦議会を通過した，民間団体によるインディアンの教育を目的とする学校の設

立および運営に対して年間1万ドルの予算支出を定めた「フロンティア周辺居住インディアン部族文明化規定法」(The Act Making Provision for the Civilization of the Indian Tribes Adjoining the Frontier Settlements, 通称「インディアン文明化基金法」)[2]によってもたらされた。この法の適用をうけたキリスト教各伝道団体は，合衆国政府の資金援助に基づく学校の設立という形で文明化を推進することができるようになったのである。わが国においても，かねてよりインディアンの文明化に関する研究はなされてきたものの，この文明化学校の実態に関する論考は，いまだに数少ない状況であると思われる。[3]

一方，白人からの諸策に対し，インディアン諸部族は多様な反応をした。本稿の舞台となる合衆国南東部に目を向けてみれば，南東部諸部族中，合衆国との戦争を行ったクリーク族(Creek)や，連邦最高裁判所へ部族の独立主権を求める提訴をおこしたチェロキー族(Cherokee)とは異なり，チカソー族(Chickasaw)は合衆国権力と直接に対決することなく，部族の存続を模索した。ここでは，このチカソー族に焦点が当てられる。[4]本稿の目的は，部族領有地を希求する南部白人プランターやフロンティア開拓民からの強大な圧力の下で，チカソー族がどのような意図をもって文明化を受容したのかを，文明化学校に関する考察を行いながら論じることである。

Ⅰ．文明化学校の建設

既に述べたように，合衆国政府のインディアン文明化政策は，1819年に制定された「インディアン文明化基金法」の規定に基づく資金援助を受けた，プロテスタント諸派団体による部族内伝道学校の設立という形で具体化された。そこで，18世紀末以降のキリスト教各宗派によるインディアンに対する布教活動と，1820年代の文明化学校の建設へと至る過程について，概略を追ってみたい。

19世紀初頭のキリスト教信仰復興（リバイバル）運動である第二次大覚醒は，個人の宗教的自覚の喚起を強調しただけではなく，神のもとなる理想的社会を目指す社会改革運動，例えば奴隷制廃止運動や禁酒運動などへもつながっていった。さらに本稿との関連でいえば，白人のみならず，海外の「異教徒」や，国内の「異教徒たる」黒人，そしてインディアンを福音の対象としてあまねく布教対象としたことも，その大きな特徴であったといえよう。また，長老派や会衆派だけではなく，バプティスト，メソジストといった他宗派もこの運動に加わり，アメリカ人の西部進出が活発なものとなるにつれて，アレゲニー山脈を越えた西部を対象としながら，同時に海外伝道をも視野に入れた布教活動が彼らによって行われるようになった。

独立間もない1780年代後半より19世紀初頭にかけて，このような布教活動を行う伝道団体が順次誕生した。これらの伝道団体の中には各宗派が共同で設立したものもあり，またその多く

は既成の宗派の支配下にはない，独立した組織であった。1787年にボストンにおいて設立された，「北米インディアン等福音伝道協会」(Society for the Propagation of the Gospel among the Indians and Others in North America) をはじめとして，「ニューヨーク伝道協会」(New York Missionary Society)，「ニューヨーク州北部伝道協会」(Northern Missionary Society of the State of New York) など，30以上にもおよぶ組織が設立された。中でも1810年に会衆派，長老派などが協力して設立した「アメリカ海外伝道協会」(American Board of Commissioners for Foreign Missions) は，その中心的組織であった。

布教活動の目的は，「異教徒」とか「野蛮人」と白人たちが考えるインディアンを悲惨な境遇と絶滅から救うための，「キリスト教徒化」を含む文明化にあった。伝道団体が派遣した伝道師は各インディアン部族内に入り込み，部族民に対して，多くの場合布教を伴った文明化教育をほどこした。インディアンに対して教育を行う学校は，既に植民地時代より，キリスト教各派によって部族単位で設立されていた。しかしこの19世紀初頭からは，連邦政府のインディアン文明化政策と協力する形で，「インディアン文明化基金法」に基づく資金援助を受けてインディアン部族民の子弟に文明化教育を施す伝道学校の設立が，積極的に行われるようになった。[5] これらの文明化学校では，男女共学の場合も，別学の場合もあったが，どちらも基本的には学校に付属した農場や作業場などにおける農業や手工業の実技教育と並行して，プロテスタント的労働倫理を含むキリスト教教育が重視された。[6]

一方，連邦政府についてみれば，政府と諸部族の間に締結された土地に関する諸条約および，1790年から1802年にかけて議会において制定された一連の連邦法，いわゆる「インディアン通商交易法」(Indian Trade and Intercourse Acts) の中に，インディアン部族の文明化を促進するため，連邦政府による資金支出を規定した条項が盛り込まれていた。諸部族と締結された条約の中には，彼らから割譲された土地の売却代金を，文明化教育に充てるという規定を設けた条約もあった。これらの立法と条約に基づき，連邦政府はインディアンの文明化を，具体的には政府派遣の部族担当官による農業器具や家畜の供与，金銭の援助，職人による実技指導などによって，部族単位で進めていった。

さらに連邦政府は，インディアン諸部族に対する布教を含めた文明化活動を行う前述の諸伝道団体へ資金を援助した。1817年にアメリカ海外伝道協会がテネシー州ブレイナード (Brainerd) に建設したチェロキー族を対象とした学校が，校舎や作業場の建設にあたって連邦政府の資金援助を受けたことなどは，その代表的な例である。[7] このような状況の中で，1819年3月3日，連邦議会は伝道団体のインディアンへ対する活動を一層促進するため，「インディアン文明化基金法」を制定したのであった。

連邦政府は，キリスト教の布教によるインディアンの宗教的変容よりも，彼らが狩猟民族か

ら農耕民族へ転換し，それによって生ずるであろう余剰地の開放をより重視していた。この点で，文明化の意義を，インディアンを絶滅から救うための正義にかなった救済ととらえていた伝道団体とは，隔たりがあったといえる。しかし，両者はインディアンの文明化の有効性を認める点で一致し，この「インディアン文明化基金法」の成立を契機として，文明化は，1820年代を通じてさらに進展することになった。連邦政府は，主として伝道団体によるインディアン文明化学校設立に資金援助を与えるという方法によって，陸軍省インディアン局の監督のもと，文明化政策を推進していった。1824年には，インディアン文明化学校の総数21校中，実に19校がこの「インディアン文明化基金法」制定後に設立されたものであった。[8]各伝道団体は，これに自らの資金と，学校を積極的に受け入れた部族から拠出された資金を加えて，学校を運営していくことになる。

かくして，1820年代を通じてチカソー領内にも文明化学校が建設されることになった。文明化学校の活動が及ぼした影響は部族によって異なったが，主に合衆国南東部地域に居住する諸部族中，チェロキー，チョクトー，チカソーなどの部族においては，合衆国側から見れば文明化が一定の成果を挙げたといわれていた。そこで次節においては，これらの部族のうち，チカソー族内における文明化学校の実態を見てみることにする。

II．チカソー領における文明化学校の建設

第1節において述べたように，「インディアン文明化基金法」の制定を受けて，各キリスト教団体は，インディアン領内に学校を設立する運動を積極的に進めた。1部族のみに対する伝道活動を行った団体よりも，複数部族を対象とした団体の方が多く，とりわけ，アメリカ海外伝道協会はこの活動の中心であった。例えば，1827年の時点で，11のインディアン部族の領内に40の伝道学校があったが，このうちの22校が，アメリカ海外伝道協会の経営によるものであった。同協会が経営する学校は，チョクトー，チェロキーに加え，セネカ (Seneca)，オーセジ (Osage)，タスカローラ (Tuscarora)，オタワ (Ottawa) 族など，複数部族内に及んでいる。[9]このように，アメリカ海外伝道協会のインディアン文明化学校設立に関する活動は活発で，1827年には，チカソー族内伝道学校の経営にも参画するようになるが，それについては後述する。

一方，チカソー族内に伝道学校を設立した長老派の2団体は，終始チカソー族のみを伝道対象とし続けた。そのひとつはテネシー州に本拠を置く「カンバーランド長老派協会」(The Cumberland Presbyterian Association)，もうひとつは「サウス・カロライナ・アンド・ジョージア長老派シノッド」(The Presbyterian Synod of South Carolina and Georgia, 別名 The South Carolina-Georgia Synod, 以下「長老派シノッド」と呼称）である。両団体は，1819年に陸軍省より資金援助の確約を得，1820年から27年にかけてチカソー領内に5つの文明化学校を建設

している。これら長老派の2団体によって建設されたチカソー領内の文明化学校の最初のものが，カンバーランド長老派協会によるチャリティ・ホール (Charity Hall) 校である。続いて，長老派シノッドによって4つの文明化学校—モンロー(Monroe) 校，トックシシュ(Tockshish) 校，マーティン(Martyn) 校，ケイニー・クリーク (Caney Creek) 校—が建設された。

次に，各学校の運営内容について見てみたい。まず，1820年，カンバーランド長老派協会が派遣したロバート・ベル (Robert Bell) 牧師によって建設された寄宿学校のチャリティ・ホール校である。この学校は，開墾された農場と，丸太作りの建物からなっており，合衆国政府より，多い時で年間に400，平均で250から300ドルの資金援助を受けて運営されていた。1832年の時点で，50から60エーカーの農場に，台所兼食堂1棟，(学校関係者用) 宿舎2棟，生徒用宿舎5棟，教室1棟，粉挽き小屋1棟，燻製小屋1棟があったことが報告されている。聖職者や，協会に所属する農民などから構成された教師陣は全部で8人で，1834年に閉校されるまでの14年間，生徒数は多い時で31人，少ない時で20人であった。また，生徒のほとんどは男子であったが，女子も少し含まれていた。男子に対しては，農業と家畜の飼育法が教え込まれ，女子には家事，織物や糸紡ぎの教育が行われるなど，実技学校としての性格が強かった。[10)]

一方，カンバーランド長老派協会に若干遅れをとったものの，長老派シノッドも1820年末より建物の建設，農場の開墾を漸次進めていた。2年後の22年春，ようやく完成したこの学校は，当時の大統領にちなんでモンロー校と名付けられた。モンロー校は当初通学制であったが，1823年からは寄宿学校となる。27年には，学校の敷地内において開拓された100エーカーの農場から収穫された農産物が，生徒の食料に当てられた。生徒数は初期は50から80人，残りの3校が建設された27年以降，1830年の閉校までの数年間は，6歳から16歳の部族民生徒20〜24人が同校において教育を受けていた。[11)]

モンロー校では当初から，入学を希望する部族民子弟をすべて受け入れられなかったため，長老派シノッドは，1824年にチカソーの古い集落トックシシュに通学制の学校を建設した。さらに26年には寄宿制のマーティン校，翌27年に寄宿制のケイニー・クリーク校を，相次いで建設した。諸校の中でも，ケイニー・クリーク校は，いかなる部族民集落からも40マイル以上離れている遠隔地に建設された点に特色があった。これは，親族から生徒をできるだけ引き離した方が，キリスト教への改宗を含めた教育の成果が，一層期待できると考えてなされた措置であった。チカソー族のものを含む文明化学校の多くは，(その実効の有無にかかわらず) 同様の意図に基づいて寄宿学校とされていたのであるが，ケイニー・クリーク校もその例に漏れなかった。1827年の時点で30エーカーの農場を所有していたトックシシュ校では，34年の閉校まで毎年15人から22人の生徒が教育を受けた。また，マーティン校は初年度は30人，その後は1832年の閉校まで18人から26人程度を，さらにケイニー・クリーク校は，初年度には35人，それ

以降は26人から30人程度の生徒を引き受けた。[12)]

各学校の教師陣は，シノッドの聖職者とその家族に加え，シノッドに雇用された教師，大工や農夫などから成っていた。例えば，モンロー校開校時の教師陣を見てみると，トーマス C. スチュアート牧師，ヒュー・ウィルソン (Hugh Wilson) 牧師，ウィリアム C. ブレア (William C.Blair) 牧師に加えて，大工 H.V. ターナー(H.V.Turner)，農夫ジェームズ・ウィルソン (James Wilson) がスチュアートの依頼により参加している。また，ケイニー・クリーク校の場合はウィルソン牧師[13)]およびその妻と娘が，教師として生徒の教育にあたった。それにもかかわらず，教師数は慢性的に不足しており，年長の生徒が下級生を指導することでその不足が補われた。

さて，学校における教育内容に目を移してみると，モンロー，トックシシュ，マーティン，ケイニー・クリークの４校では，チャリティ・ホールとは幾分異なった教育が施されていたようである。例えば，チャリティ・ホールでは重視されなかった教養科目，すなわち読み書き，地理，算数，英語文法，作文にも重点が置かれた。さらに，男子生徒に対しては木工，鍛冶，農業，牧畜，女子生徒へは裁縫，糸紡ぎ，織物，編物，家事といった実技教育も平行して行われている。さらに，毎日の祈り，夕べの祈禱，聖書講読，禁酒教育，キリスト教教義の講義といった，宗教色の濃いカリキュラムが組み込まれていたことも，実技を中心としたチャリティ・ホール校の場合と異なる点であった。[14)]

しかしながら，文明化学校におけるインディアンへの文明化教育の場合，英語で教育を行うことには非常な困難があった。一方，教師の中にも部族の言葉に通じた者はほとんどいなかった。このような問題の解決のため，チカソー領南辺に居住するチョクトー族内の伝道学校においては，当時，既にチョクトーの口語発音を英語のアルファベットに置き換えて文字化し，さらにこれを用いて，読み書き，計算，賛美歌，教理問答用の教科書が作られていた。

もともと，ヨーロッパ人の新大陸到達以前にチョクトー族から分かれたといわれるチカソー族は，チョクトー族と同じ言語系統であるモスコーギー語族 (Muskhogean) に属しており，言葉はチョクトー族のものとほぼ同じであった。そこで，チカソー文明化学校の授業においてもこの教科書が用いられた。しかし，あくまで授業は原則的に英語で進められたため，授業は意味も解らないままの暗唱，書き取り，間違いだらけの計算に終ることが多かった。それでも，文字というものを持たなかったチカソー族の子弟たちの英語能力は，学校に行かない部族民よりも向上した。[15)]

1825年，インディアン局長トーマス L. マッケニー(Thomas L. McKenney) の陸軍長官Ｊ．バーバー(J.Barbour) への報告書によれば，チャリティ・ホール校は「かなりの成功を収めつつある」と，報告されている。[16)]さらに，アメリカ海外伝道協会の1827年の年次報告において，

モンロー校は，同協会がチョクトー，チェロキー族領内で運営していた他の文明化学校に比べて問題が少なく，生徒は文明化の程度においても「素晴らしい進歩を遂げた」[17]と書かれている。また，先に述べたように，モンロー校の開校後，部族民子弟の入学希望が相次ぎ，引き続き3つの学校が設立されたという事実から，チカソー族内文明化学校の経営は，順調に進められていたことが推察されるのである。

そこで次節においては，文明化学校はチカソー部族民の側からはどのように受けいれられ，また実際にどのような変容を部族にもたらしたのかということについて，検討を加えてみたい。

III. 混血部族民による「文明化」伝道学校の受容

1825年から8年間にわたるインディアン局作成の統計によれば，この時期にチカソー領内の各伝道学校に在学していたチカソー部族民子弟は，毎年平均して70人程度であった。[18]1820年代から30年代にかけて，およそ4～5000人であったと推定されているチカソーの部族人口を考えると，文明化学校で教育を受けた部族民子弟の数は決して多くはないように思われる。しかしこの生徒たちの構成を見てみると，そこには重要な意味があることに気がつく。文明化学校で学ぶこれらの部族民生徒は，当時の部族全人口の約25パーセントにあたる，白人男性と部族民女性との間に生まれた混血部族民子弟であり，残り4分の3の純血部族民の子弟はほとんどいなかったのである。[19]

それではチカソーの文明化学校における生徒は，何故，そのほとんどが混血部族民の子弟によって占められていたのであろうか。それにはまず，チカソー族における混血部族民層の部族内における立場を見る必要がある。チカソー族は，北米大陸大西洋沿岸地域から南東部に進出しようとしたイギリスとの間に，18世紀初頭より独立戦争に至るまで，強い友好関係を結んでいた。好戦的部族として知られるチカソーは，北米大陸の毛皮交易へ積極的に参加するとともに，南東部地域におけるイギリスの競合相手スペイン，フランス，およびフランスと結ぶチョクトー族に代表される他のインディアン部族へ対抗する，重要な親英勢力であった。チカソー族内における混血部族民は，18世紀を通じて領内に定住したイギリス人交易商や，アメリカ独立戦争時，チカソー領内へ難を逃れた王党派の男性と部族民女性との間に生まれた子弟だったのである。

古来チカソー族は各氏族に区分けされ，おのおのの氏族はその長によって統率されていた。各氏族中，上流氏族の代表者によって構成される「部族会議」と，そこから選出された終身の「大族長」(principal chief, headchief，あるいはking)の2者によって，全部族が統括されていた。この大族長と部族会議を中心として運営される部族政治体制は，18世紀には確立されていた。[20]

本来ならば，純血部族民からなる氏族制に基礎をおく，このような体制への混血部族民の参

入は困難なはずであった。しかしながら，混血部族民がもつアングロ・サクソン社会に関する知識や英語能力は，必然的に混血部族民をして白人との条約などの交渉の場に立たせることになった。純血部族民が支配する部族会議は，合衆国との交渉では混血部族民を表に立て，その見返りとして，部族全体にとっての不利益にならない限り，混血部族民がその交渉から金銭等の個人的利益を得ることを黙認した。

独立戦争において，チカソー族はイギリス側についてジョージア邦民兵などからなるアメリカ軍と交戦したが，1783年に戦争が終結するとともに，同年11月12日，合衆国と講和条約を締結した。[21]以後，他のインディアン諸部族と同様に，チカソー族も部族の領有地を希求する白人からの圧力と，文明化政策への対応を迫られる中，合衆国との新たな関係を模索していくことになる。チカソー族は，1786年に締結されたホープウェル条約 (Hopewell Treaty)[22]を皮切りとして，1801年，05年，16年，18年と5回におよぶ一連の条約[23]によって，合衆国へ漸次部族領有地を割譲していった。19世紀にはいって，乱獲による獲物の減少で北米大陸における毛皮貿易が衰退し，その一方で狩猟に要する広大な領有地が割譲によって失われていくと共に，部族民の生活基盤は従来の狩猟から農業と牧畜業へ転換し始めた。この転換は連邦政府の意図する部族民の農民化，すなわち文明化政策に基づく工具，鍬，鋤，紡ぎ車といった農機具の支給によってさらに推進された。純血部族民が自給自足の小農民化する一方，混血部族民はより大規模に，牛と豚の畜産やトウモロコシの栽培を行う農場を経営した。また収穫物を部族外へ売却する商業活動を行い，さらには南部白人を模倣して，黒人奴隷を用いての綿花栽培にまで携わるようになっていった。その結果，純血部族民からなる貧しい農民や猟師層と，混血部族民からなる富裕なプランター，商人層といった階層分化が1820年代には顕著となった。[24]

混血部族民は，連邦政府との交渉の場において，土地の割譲と引き換えに，合衆国から部族会議を構成する指導者たちへの年金支給という条件を引き出した。これは，土地の割譲を実現するため，影響力をもつ部族指導者たちへ贈られる賄賂的な意味をもつもので，合衆国によってしばしば用いられた手段であった。チカソー族の場合，支給された金銭の半分は部族共有の財産たる部族基金に組み入れられ，残りの半分は報酬として混血部族民へ与えられた。混血部族民はそれを，経済活動の過程で生じた白人交易会社に対する負債の償還に充てることができた。その代わりに混血部族民は，交渉の場において全部族民にとって少しでも有利な条件を引き出すことを期待されていたのである。このように混血部族民は，部族内の少数派でありながら，純血部族民が支配する部族会議体制の外交面を担うようになった。そして，この混血部族民層を代表するのがコルバート家 (The Colberts) であった。

コルバート家の混血部族民たちは，18世紀中葉北米に移住しチカソー領内に定住したスコットランド人男性ジェームズ・ローガン・コルバート (James Logan Colbert) と複数の部族民

女性との間に生まれた息子たちであった。中でもウィリアム(William)，ジョージ(George)，リーヴァイ(Levi)の3人は，アメリカ独立戦争とそれに続くスペインとの抗争で部族を率いて活躍した父ローガンが確立したコルバート家の名声を引き継ぎ，部族が参加した数々の戦争における活躍と，その政治力，経済力によって次第に台頭し，混血部族民を代表する指導者となっていった。[25]彼らの主導によって，合衆国との間に締結された1801年の土地割譲条約においては，部族領内を貫通してテネシーとミシシッピを結ぶナッチェズ道の建設を合衆国に認めるのと引き換えに，領内における部族民の独占的営業権が認められた。これによって，混血部族民たちは，領内を通過する旅行者に物資や農産物を供給する店舗と宿泊設備や渡し舟を独占的に経営するようになった。[26]

このようにして，文明化学校が建設された1820年代におけるチカソーの部族政治支配体制は，部族人口の4分の3を占める純血部族民を統括する，大族長イシテンホトパ(Ishitenhotopa)を筆頭とする部族会議と，コルバート家，特にリーヴァイ・コルバートによって代表される残り4分の1の混血部族民層の二重構造となっていた。この時期，影響力を増した混血部族民族長の何人かは部族会議のメンバーにまでなり，また1827年にはリーヴァイ・コルバートが大族長イシテンホトパのアドバイザーとして，部族会議の中心に参画できることになった。1829年6月8日，インディアン局長マッケニーは，当時の陸軍長官ジョン H. イートン(John H.Eaton)に宛てた手紙の中で，リーヴァイはチカソーにとって「身体に対する魂のような存在」であり，部族民たちは彼と彼の部下たちの命令に従っている，と報告している。[27]

このように18世紀末から1820年代にかけて，合衆国との関係から生じた変化によって，混血部族民は部族内政治における影響力を次第に増大させた。その要因は，すでに触れたように農業に関する知識と経営手腕より生み出された経済力，および合衆国との交渉において必要とされる英語運用能力であった。しかし，混血部族民の多くは英語を話すことはできたが，読み書きのできる者は少なかった。そこで混血部族民は，自分たちの子弟に，文明化学校で行われる農業実技教育と英語教育を受けさせることを望んだのである。

チカソー混血部族民は，実際に文明化学校の建設と運営にも積極的に関与していた。モンロー校設立に始まる一連の事態の推移を見ても，そのことは明らかである。陸軍省より学校設立の認可を得た長老派シノッドは，1820年に前述のスチュアート牧師およびデイヴィッド・ハンフリーズ(David Humphries)牧師を，文明化学校設立候補地の選定のため，南部インディアン諸部族のもとへ派遣した。スチュアート一行は，まずチカソー領の東部に位置する，アラバマとジョージア両州にまたがる地域に居住するクリーク族を訪れた。部族会議に集まったクリーク族指導者たちにスチュアートらは，領内に教会，学校，機械工作所を設立したいという意向を伝えた。

クリーク族の文明化に関しては，18世紀末より連邦政府が派遣したクリーク族担当官兼南部地域インディアン監督官ベンジャミン・ホーキンズ（Benjamin Hawkins）の援助と指導，さらにモラヴィア教会による手工業学校の設立によって，若干の成果がもたらされつつあった。[28]その一方で，文明化に反発し，部族古来の自然宗教，慣習，伝統を維持しようとする保守的な勢力も部族内には多数存在していた。その結果，クリーク族は連邦政府との融和をはかり文明化の受け入れを指向する親米派と，文明化に反発する反米派に二分されることになった。両者の対立抗争は激化し，反米守旧派は親米派部族民に襲撃を加え，その際多くの白人も虐殺した。クリーク族の領土を求める連邦政府およびジョージア州はこれを口実に部族内抗争に介入し，反米派を掃討した。これが1813年に始まる「クリーク戦争」である。戦後も両派の対立は続き，それに乗じた合衆国は1814年から26年にかけて，広大な領土を割譲させた。[29]またこの時期には，クリーク族の残余の土地を求めるジョージア州からの圧力も強まりつつあった。スチュアート一行が訪れた時のクリーク族は，このように混乱した状況下にあった。クリーク族の指導者たちは，文明化学校の設立によって部族の子弟が農民や職人になる，つまり「白人化」することは，白人たちによる侵略の足掛かりとなるのではないかという強い懸念を表明し，結局スチュアートらの要望を拒否したのである。

その後，スチュアートらは西方のチカソー領内へと向かった。彼らは領内に入ると，まず部族の有力者リーヴァイ・コルバートを訪問し，歓待を受けた。次いで彼らはリーヴァイの勧めにより，兄のジョージ・コルバート宅にも赴いた。スチュアートらは，部族指導者たちの集まる部族会議で学校設立の是非に関する討議が行われるのに先立ち，リーヴァイの尽力により，ジョージ宅に集まった多くの部族指導者と面識を持つことができた。また，学校設立を正式に承認する部族会議は，リーヴァイらの異母弟，ジェームズ・コルバート（James Colbert）の自宅で行われた。チカソーの集落トックシシュにあるウィリアム・コルバート宅において再び開催された部族会議では，文明化学校の建設予定地が定められた。[30]

これらのことからも，コルバート家の部族政治における影響力の大きさが推し測れよう。1824年，モンロー校（22年創立）の成功を見たチカソー指導者たちは，新たな学校の建設を決意した。部族会議は学校建設費用として5,000ドル，その後の維持費として年間2,500ドルを部族基金より支出する決定を下した。連邦政府より支出される「文明化基金」とシノッドの自己資金があったとはいえ，この部族からの支出が学校にとって最も大きな資金源となった。部族から資金の運用を任された長老派シノッドは，トックシシュ校，マーティン校，ケイニー・クリーク校を次々と建設した。学校運営の管轄がシノッドからアメリカ海外伝道協会へ移った1827年以降も，諸学校に対する部族会議の財政援助は続いた。また，資金拠出のみならず，部族会議は文明化学校における教育プログラムも監督し，時には大族長自身が諸学校を訪問することも

あった。

クリーク族の場合と同様，チカソー部族民の中には部族古来の宗教や伝統に固執し，文明化とキリスト教会に反発する，主に純血部族民よりなる勢力が依然として存在しており，キリスト教へ改宗した部族民に迫害を加えることもあった。しかし両者の対立は学校の設立にあたって，クリーク族のように部族を二分する事態にまでは至らなかった。その理由を理解するには，部族民のキリスト教への改宗状況をみる必要がある。

チカソー部族民に対する布教活動は，文明化学校のみならず，18世紀後半より1820年代にかけて部族領内に入った長老派のニューヨーク伝道協会の他，「ミシシッピ・メソジスト協議会」(Mississippi Conference of the Methodist Church)，「バプテスト海外伝道協会」(Baptist Board of Foreign Missions) といった諸宗派キリスト教伝道団体によっても行われた。これらの団体による布教活動は，多くの場合啓蒙活動の一環として英語教育を伴ったので，文明化学校と同様に，混血部族民の英語能力向上に寄与した。しかしながらその一方で，1820年代には部族民総数の約2パーセントである100名程度の部族民がキリスト教に改宗していたに過ぎず，キリスト教伝道の成果は一向に上がらなかった。[31)]

では，混血部族民の強い影響力の下にあったとはいえ，キリスト教に反発する部族内保守勢力たる純血部族民が構成する部族会議が，文明化学校を受け入れ，資金援助さえしたという矛盾はどう説明されるのであろうか。それは，混血部族民指導者たちにとっても，学校の目的はあくまで英語教育と農業知識の教育にあり，キリスト教教育についてはほとんど無視し得たからと考えられる。事実，部族会議の監視下におかれた文明化学校において，生徒の英語や農業実技教育が進展する一方，過度のキリスト教教育は部族会議によって統制を受け，改宗は遅々として進まなかったのである。つまり，部族民のキリスト教化という観点から見れば，学校は文明化にはさほど寄与しなかった。文明化は，純血部族民を代表する部族会議を刺激しない程度に，混血部族民の利益に添う形で受容されていたのである。

おわりに

文明化学校は，インディアンの農民化によって生じた余剰領有地の開放を掲げる連邦政府と，「無知蒙昧」な「高貴な野蛮人」の啓蒙を目指すキリスト教伝道団体の思惑が合致した結果，インディアンの文明化を大義名分として設立された。チカソー族の場合，学校へ積極的に入学して教育を受けた混血部族民子弟の英語能力が向上したことは，文明化教育の大きな成果といえる。しかし文明化教育を受けたのは大多数が混血部族民の子弟であり，生徒の中には部族民の多数を占める純血部族民の子弟はほとんど見られず，彼等のキリスト教化も遅々として進まなかった。つまり，チカソー族内の混血部族民は，部族内多数派の純血部族民が固執する部族

アイデンティティに関わる問題に触れずに，文明化から生み出される恩恵を自らの繁栄と部族の存続にとって有益な点のみ享受することに努力を傾注したのである。

最後に，チカソー族内の文明化学校のその後について，簡単に述べておきたい。インディアン諸部族領有地を希求する各州の圧力が高まる中，1830年に連邦議会で成立したいわゆる「インディアン強制移住法」(Indian Removal Act) を受け，同年から36年にかけて，現在の部族領有地を明け渡し，部族にとって納得のいく西部の新居住地と交換する交渉が，部族と政府の派遣した使節との間に粘り強く続けられた。[32]それと共に，部族会議は学校への資金援助を打ち切ったが，その結果として1830年にモンロー校，32年にマーティン校，34年にはトックシシュ校と，部族基金に多くを依存していた各伝道学校は相次いで閉校に追い込まれた。チャリティ・ホール校とケイニー・クリーク校が閉校した時期については定かではないが，チャリティ・ホール校の場合，1832年のインディアン局の学校統計に既に記載がないことから，それ以前に閉校したと思われる。また，ケイニー・クリーク校も同様に，1834年以降はチカソーの全文明化学校の記載がみられないことから，同年もしくは同年以前に閉校に追い込まれていたようである。[33]

チョクトー (1831～34)，クリーク (1836～37)，チェロキー (1838～39) を含む各インディアン部族が「自発的」に，あるいは武力強制によって西部への移住を開始する中，チカソー族も1837年から38年にかけて，現在のオクラホマ州南東部地域へと移住した。[34]移住後の，1840年代から50年代にかけて，チカソー族内における主導権掌握を目指し，移住によって混乱した部族の新たな統合とさらなる文明化を推進していったのは，1820年代の文明化学校において英語や農業実技教育を受けた混血部族民子弟たちであった。

注

1）建国期から19世紀初頭にかけての白人のインディアン観については，Reginald Horsman, *Race and Manifest Destiny: The Origins of American Racial Anglo-Saxonism*(Cambridge: Harvard Univ. Press, 1981); James Levernier and Henning Cohen (eds.), *The Indian and Their Captives* (Westport: Greenwood Press, 1977); Richard Drinnon, *Facing West: The Metaphysics of Indian-Hating and Empire-Building* (Minneapolis: Univ. of Minnesota Press, 1980); Ronald T. Takaki, *Iron Cages: Race and Culture in Nineteen-Century America* (London: The Athlone Press, 1980) などを参照。

2）Francis Paul Prucha, *Documents of United States Indian Policy* (Lincoln/London: Univ. of Nebraska Press, 1990) p.33

3）代表的なものとして，鵜月裕典「ジャクソン期インディアン強制移住政策とインディアン－インディアン移住＝隔離・インディアン文明化・インディアン領地構想－」『常識のア

メリカ・歴史のアメリカー歴史の新たな胎動ー』(木鐸社，1993年)，上田伝明『インディアン憲法崩壊史研究』(日本評論社，1974年)，佐藤円「強制移住政策下のチェロキー族ー大族長ジョン・ロスのリーダーシップをめぐってー」『史宛』50-1 (1990年)，85-109頁，富田虎男『アメリカ・インディアンの歴史 [改訂版]』(雄山閣，1986年) 等。

4) 南東部諸部族の中で最も広大な土地を領有していたのがチェロキー，チョクトー(Choctaw)，クリーク，チカソー族の4部族だった。彼らは白人と早くから接触してきたこともあって，政府または各伝道団体による文明化政策をかなりの程度まで受容し，その結果白人側からは，これにセミノール族(Seminole)を加えて「文明化5部族」と呼ばれていた。

チカソー族は，19世紀初頭に前述の3部族が約2万5000，3万，そして2万人を数えたのに比べ，4～5000人と比較的少ない部族人口だった。とはいえ，18世紀初頭から同世紀末のアメリカ合衆国独立に至るまで，イギリス人交易商と部族民女性との通婚を背景とした，諸部族中最も親密なイギリスおよびアメリカとの関係と，周辺部族も恐れたその好戦性によって，他の3部族にも比肩しうる大きな覇権と影響力を有する部族となっていた。

Duane Champagne, *Social Order and Political Change: Constitutional Governments among the Cherokee, the Choctaw, the Chickasaw and the Creek* (Stanford: Stanford University Press, 1992), pp. 13-14, 62,158 & 282; Muriel H. Wright, *A Guide to the Indian Tribes of Oklahoma* (Norman: Univ. of Oklahoma Press, 1951), pp. 58, 99 & 130.

チカソー族に関する研究については，Anne Kelley Hoyt, *Bibliography of the Chickasaw* (Metuchen, New Jersey & London: The Scarecrow Press, 1987) を参照。現在のところチカソー族に関する集大成は，Arrell M. Gibson, *The Chickasaws* (Norman: Univ. of Oklahoma Press, 1971) また，Champagne の前掲書にもチカソー族に関する詳細な記述がある。

5) R. Pierce Beaver, "Protestant Churches and Indians," in Wilcomb Washburn ed., *Handbook of North American Indians, vol.4: History of Indian-White Relations* (Washington: Smithonian Institution, 1988), pp. 436-7; Percy L. Rainwater, "Indian Missions and Missionaries," *Journal of Mississippi History,* 108(1966), pp.18-9; Sydney E. Ahlstorom, *A Religious History of the American People* (New Haven and London: Yale Univ. Press, 1972), pp. 100-4; Stephen Neill, *A History of Christian Missions* (London: Penguin Books, 1962), pp. 170-1; 黒岩裕「日米少数民族比較論ーアイヌとアメリカ・インディアンー」『神田外語大学紀要』5号 (1993年) 173-4頁。

6) Margaret Connell Szasz and Carmelita Ryan, "American Indian Education," in

Washburn ed., *History of Indian-White Relations,* p.288.

7) William G. McLoughlin, *Cherokee Renascence in the New Republic* (Princeton: Princeton Univ, Press, 1986), p. 250.; McLoughlin, Edited by Walter H. Conser, Jr., *The Cherokees and Christianity, 1794-1870* (Athens & London: The Univ. of Georgia Press, 1994), p.63.

8) *Annual Report of the Commissioner of Indian Affairs* (以下 *ARCIA* と略称) November 24, 1824.

9) *ARCIA,* November 24, 1827.

10) Guy B. Braden, "The Colberts and the Chickasaw Nation," *Tennessee Historical Quarterly,* 107.(1958), p. 248; Gibson, *op. cit.,* pp.109-10; Bell to Calhoun, April 9, 1822, *Letters Received by the Office of the Secretary of War Relating to Indian Affairs, 1800-24,* National Archives, Microcopy 271 Roll 4; Nicholas to Calhoun, April 20, 1822, *ibid;* Rainwater, *op. cit.,* p.39.

11) A. Phelps Dawson, "The Chickasaw Mission," *Journal of Mississippi History,* 13(1951), pp.228-9; Gibson, op. cit., pp.110-1.

12) Dawson, *op. cit.,* pp. 230-1; Gibson, *op. cit.,* pp. 111-2.

1827年，資金不足に悩む長老派シノッドは，これら4学校の管轄権をアメリカ海外伝道協会へ譲り渡した。これによって，アメリカ海外伝道協会はチャリティ・ホール校を除くチカソー内4学校を含む，24校にも及ぶインディアン文明化学校の管轄権を握ることになった。ただしアメリカ海外伝道協会の要求により，長老派シノッドに所属するメンバーが，その後も引き続きチカソー内伝文明化学校の運営に携わることになった。例えば，モンロー校の設立に尽力した人物，トーマス C．スチュアート (Thomas C. Stuart) 牧師は，これら4学校を統括する監督官として，1828年までその任に当たっている

Dawson, *op. cit.,* pp.231-2; Gibson, *op. cit.,* p.113.

13) モンロー校教師であった人物と同一人であるかどうかは不明。

14) Dawson, *op. cit.,* pp. 227-8 & 230-1; Gibson, *op. cit.,* p. 111; Rainwater, *op. cit.,* p.39.

15) Pamela Munro & Catherine Willmond, *Chickasaw: An Analytical Dictionary* (Norman & London: Univ.of Oklahoma Press, 1994), p.9.; Gibson, *op. cit.,* pp.112-3; Wright, *op. cit.,* p.84.

16) Mckenney to Barbour, December 28, 1825, ARCIA.

17) Dawson, *op. cit.,* p.229.

18) *ARCIA,* Dec. 3, 1825; *ibid,* November 24, 1827; *ibid,* November 1, 1828; *ibid* November 17, 1829; *ibid,* November 25, 1830; *ibid,* November 4, 1831; *ibid,* November 29, 1832.

19) Gibson, *op. cit.*, p.110.

20) Wright, *op. cit.*, p. 87.; Samuel D. Dickinson, "Indians Signs on the Land," in Jeannie Whayne, ed., *Cultural Encounters in the Early South: Indians and Europeans in Arkansas* (Fayetteville: The Univ. of Arkansas Press, 1995), p.148. (21) Robert S. Cotterill, "The Virginia-Chickasaw Treaty of 1783," *The Journal of Southern History,* 8(1942), pp.483-96.

22) 同条約は1785年11月28日にチェロキー族と，翌1786年1月3日にチョクトー族と，同年1月10日にチカソー族と合衆国の間に締結され，これら諸部族と合衆国の領域の境界線を規定した。

Prucha, *American Indian Treaties: The History of a Political Anomaly* (Berkeley, Los Angeles & London: Univ. of California Press, 1994), p.448.

23) Prucha, *Atlas of Indian Affairs* (Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 1990), p.148.; Prucha, *American Indian Treaties,* pp.450,453,458 & 461.

24) Champagne, *op. cit.*, pp.89-90, 110, & 111-12.; William S. Coker & Thomas D. Watson, *Indian Traders of the Southeastern Spanish Borderlands: Panton, Leslie & Company and John Forbes & Company, 1783-184* (Pensacola: Univ. of West Florida Press, 1986), pp.257-8.

25) D. C. Corbitt, "James Colbert and the Spanish Claims to the East Bank of the Mississippi," *The Mississippi Valley Historical Review,* 104(1938), pp.457-72.

コルバートの兄弟らを含むチカソー族は，1794年のフォールン・ティンバーズの戦い，1812年戦争，翌13年から14年にかけてのクリーク戦争，1817年から18年にかけての第1次セミノール戦争の一連の合衆国対インディアン戦争において，合衆国側について参戦した。

26) Champagne, *op. cit.*, pp. 110-1, 158 & 282.

27) Dawson, "The Chickasaw Council House," *Journal of Mississippi History,* 14(1952), p.170. Braden, *op. cit.*, p. 231.; Champagne, *op. cit.*, p. 159-60(28) Carl Waldman, *Who Was Who in Native American History* (New York: Factson File, 1990), p.147; J. Leitch Wright, Jr., *Creeks & Seminoles: The Destruction and Regeneration of the Muscogulge People* (Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 1986), p.222.

29) Gregory Evans Dowd, *A Spirited Resistance: The North American Indian Struggle for Unity, 1745-1815* (London: The John Hopkins Univ. Press, 1992), pp. 134-5; 富田『アメリカ・インディアン』，115-6頁。

30) Dawson, "Chickasaw Mission," p.227; Rainwater, *op.cit.*, pp.33-4.

長老派シノッドによる学校の完成に先だち，ジョージが提供した土地にチャリティ・ホー

ル校が建設されているが，リーヴァイの子供たちはここでで教育を受けた。

Braden, *op. cit.*, p.233; Rainwater, *ibid*, p.39.

31) Champagne, *op. cit.*, p.159; Gibson, *op. cit.*, pp. 107-8, 113-4 & 134.

32) チカソー族の強制移住については，Grant Foreman, *Indian Removal* (Norman: Univ. of Oklahoma Press, 1932), pp.193-228. に詳しい。

33) *ARCIA*, November 29, 1832; *ibid.*, November, 1834.

34) 武力によって強制的に移住させられ多くの犠牲者を出し，「涙の旅路」と呼ばれたチェロキー族の事例を挙げるまでもなく，インディアンの悲惨な強制移住の物語は広く知られているところである。その中にあって，チカソー族は比較的軽微な損害を被っただけで移住を行うことができたという事実は，今後検討するに値しよう。

The Indian 'Civilization' Mission Schools in the 1820s
— A Case Study of the Chickasaw Indian Tribe —

Yoshitaka IWASAKI & Masaru OKAMOTO

The idea of 'civilization' of the American Indian meant the promotion of education in the white men's way, especially in the areas of agriculture, domestic and mechanic arts, and spreading of Christianity among the 'savage' Indians in the hope that they might become adapted to Anglo-American culture. Such efforts were also based on the supposition that the Indians would cede their vast lands for hunting to land-hungry white men after the Indians were turned into farmers holding small private land and abandoned surplus lands.

In 1819, the US government enacted the Indian Civilization Law, which provided appropriation of funds for the benevolent societies which were to teach the Indians to be civilized. Protestant missionaries, who received an annual fund, founded mission schools among the Indian tribes in 1820s.

The object of this paper is to examine the impact of the Indian civilization mission schools on the tribes in the 1820s, with special emphasis on the case of the Chickasaw Indian tribe. It appears that civilization might have been possible if it was made in the interests of the tribe's sense of values, but not under a system based on the white men's self-satisfaction stemming from European values. This civilization was also made possible by the mixed-blood tribesmen's quest for tribal leadership by utilizing the Government's civilization fund.

Thus, if the Chickasaws looked civilized, it did not necessarily mean that civilization had the effect of assimilating Indians into American society.